類号				
分番				

本社

58. 7. 16

掲載紙名

ピウスツキのロウ管

再生への道

資金・技術 広がる協力

ロウ管が北大に到着するまでには、多くの人たちの有形、無形の協力があった。ポーランドのワルシャワでは、現地のA・F・マイエヴィチ教授が税関に手配し、そこからパリまでは外務省が協力してNHKパリ総局が選び、成田までは日航が無料で空輸した。当面の課題はロウ管を復元するための資金だが、札幌市内の医師が「樺太アイヌ語研究の一助に」と寄付を申し出てくれた。またロウ管の複製品を作るには特殊技術が必要であることを知った北大歯学部関係者が「歯の型を作る技術を提供しましょう」と、積極的に技術協力に乗り出した。

こうした支援を受けて、日本とポーランド両国の言語、民族、音楽、電子工学の研究者で構成する国際研究組織「ピウスツキ北方資料研究会」（略称ICRAP、日本側代表加藤九祚国立民族学博物館教授）が本格的な活動を始めた。日本側は北大、小樽商大、道教育大、民族学博物館を中心に三十九人、ポーランド側はアダム・ミツキェヴィチ大学関係者ら十人の研究者が参加している。

※

ロウ管に秘められた樺太アイヌ語を再生するうえで、最も困難なのは、音響工学的な再生技術の開発である。「約八十年前のロウ管は、人間の声のエネルギーだけでロウ管の溝に小さな情報を収めている。もともとの録音が雑なのに加え、カビでかなり腐食されている」「光の反射光を電気信号に変換する最先端の方法でも、元の音声を探り当てるのは大変な作業。大型コンピューターによる膨大な計算が必要だ…」。ポーランドから届いたロウ管を点検した北大応用電気研究所の朝倉利光教授（光計測）、伊福部達助教授（感覚情報工学）は改めてこの作業の難しさを痛感した。

※

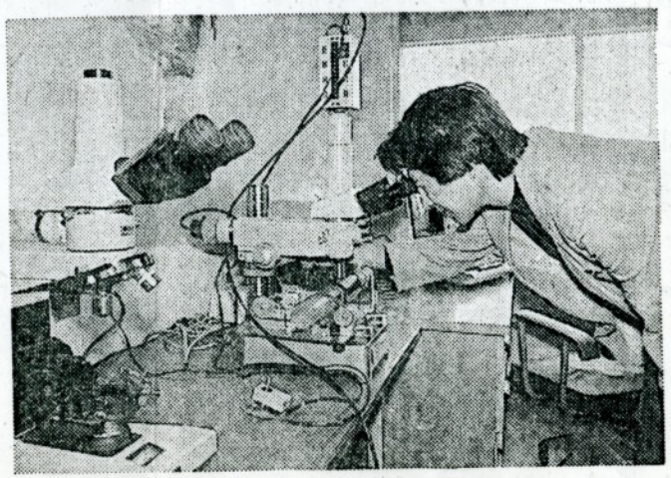
再生作業の第一段階はロウ管表面のカビ取りから行われる。このため、同助教授は東京の美術修復家に依頼し、顕微鏡を使いながらの手作業で取り除いてもらうという。次に歯学部の技術でロウ管の型を取り、精度の高い複製品を作り上げる。このあと光を斜め四五度から当てて反射光を電気信号に変換する「触針法」の二つの方法で音声再生を試みるが、いかにコンピューターで雑音を除き、元の肉声に近づけるかが勝負どころだ。

その後、言語学者らが総力を挙げて、音を表記、解読することになるが、「樺太引き揚げのアイヌの方に、ぜひお手伝いいただきたい」と北大文学部の池上二良教授は協力を呼びかけていく考えだ。

※

このプロジェクトが成功すれば、北海道アイヌ語より古い形を残す樺太アイヌ語の言語学的系統、アイヌ語方言の比較研究、シベリア諸民族の言語、文化との関係解明の糸口がつかめることはまちがいない。またユーラシア、アリューシャンを含む民族音楽の文化変容理論の形成にも役立つはずだ。

ピウスツキのロウ管に限らず、欧州各国と交渉には、民族学者らが北方諸民族の言語を記録したロウ管が散逸しているといわれる。世界で初めての本格的な再生作業は、ロウ管研究の先駆的役割を果たす意味で重要であり、歴史が現代の私たちに残してくれたロマンである。



北大応用電気研究所では「光切断法」による音声再生の実験が始まった

Antoni Kuriski さんへ
佐川信一郎

56. 7. 200,000

49